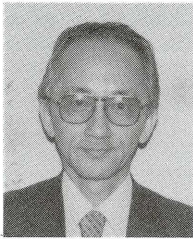


西南学院大学・ 図書館報

社会人と読書	2・3
金子啓一・古賀衛・横川和男・松村敬治 卒業生から後輩へ	4・5
笹田晴子・小川敏治・鶴田悦子・横溝秀樹 吉林大学の図書館	王占華 6
近未来の図書館は	篠崎珣 7
卒業後の図書館利用について	8



人生という書物

学術研究所長 有田 忠郎

「極端に言えば書物には二種類しかない。通読可能な本と不可能な本だ」と、夢の中の老人は言った。いたずらっぽい眼が笑っていた。

「分からないかね。物語と辞書さ。これが人生という大きな海を囲んでいる」

「ぼくらは海の中の魚というわけですか」と私は聞いた。

「まあ、そうだ。哲学や経済学は魚をうまく捕まえるための網かな。たいていは目が荒すぎて逃げてしまうがね」

「魚だって魚の物語があるし、魚語の字引もあるでしょう」

老人はちょっと真面目な顔になった。

「そのとおり。君がもっている語彙。それが君の字引だ。貧弱なものだがね。そして朝がきて夜がきて、というふうに、毎日短い物語を書きながら生きている」

「人間は歩く言葉の体系だと言った詩人がいます。」

「そんな立派なものじゃなかろう。君自身が、神様が編んだ辞書の中に小見出して出ていたり、誰かが書いた物語の端役だったりするからね。しかし、そう言いたくなる気持ちは分かる。まあ、うんと大きな辞書と面白い物語を傍に置くといい」

「人生という書物、と言いたいのでしょう。ところで、あなたには『砂の本』という小説がありますね」

「ふふん、あんなものを読んだのかね」
老人は少し照れた顔になった。

「どこからでもページが砂のように無限に湧き出て、初めも終わりもない。最初のページと表紙の間に指をはさもうとしても、必ず何枚かの紙がその前にある。同じページを見つけることは二度とできない。馬鹿げていますよ。あんな本がありますか」

「ないからこそ、小説で書かなければならなかったのさ。いいかね。本をそのまま信じてはいけない。一冊の本は、無限の書物、あり得ない書物の中に含まれているのだ。君は自分の人生を一冊の本のように読もうとしている。それはよろしい。しかし、その本がもっと大きな、考えることもできないような本の中に包まれているのでなければ、どんな意味があるのかね。辞書も物語も、ほんとうは疑ってかかるべきなのだ」

「分かった。中心が到るところにあって、周辺はどこにもない世界。砂の本というのはそんなもので、人生を一冊の書物に譬えるならば、そこまでいかなければ嘘だ。あなたはそう言いたいのですね」

ここで私は眼がさめた。夢で会ったこの老人は、名前をホルヘ・ルイス・ボルヘスという。迷路みたいな音韻です。興味のある人は辞書で探してみたいかが。さて、卒業ですね。めいめい、よい物語を書いて読ませてください。

(ありた・ただお：文学部教授)

社

会

人

と

読

書

卒業生へ読書のススメ

『現代の批判』

キルケゴール著

国際文化学科 助教授 金子 啓 一

「現代は本質的に分別の時代、反省の時代、情熱のない時代であり、束の間の感激にぱっと燃えあがっても、やがて小賢しく無感動の状態におさまってしまうといった時代である」

これは、1846年にデンマークの思想家キルケゴールによって書かれた文章の一節ですが、今世紀末の現代に書かれたといっても決して言いすぎではない内実を持っています。キルケゴールは、(フランス)革命の時代と異なり、当時の現代は、分別や機知はあるが、情熱を喪失した時代で、人々は反省するが責任を取って決断し、主体的に「単独者」として行動することを放棄していると指摘します。人々は「水平化」現象によって数量で計られ没個性化している。

「無責任な傍観者」に過ぎない。革命時代は情熱ゆえに「道に迷っている」かもしれないが造形力があった、それに比べ反省のみの情熱無き時代は創造的なものを何物も生み出さない。こざかしい分別が高く評価されるこの「当て込みの時代」に「人の欲しがるものは、結局、金銭だ」とキルケゴールは批判するのです。

私たちの現代をキルケゴールの「現代」と単純に同一視出来ませんが、本書は今日への激しい問い掛けだと言えるでしょう。これから皆さんは、忙しさの中で、仕事関係も含め、これまで以上に「読書」の心要性に迫られることでしょう。そうした「読書」には、いわゆる実際的なもの・一回限りで済むものも多いと思いますが、反復して身読できる「古典」——壁にぶつかったときに元気の素を示し、広い視野と深い洞察を与えてくれるような書物——もその中に加えてあるかどうか、検討してみたいかがでしょうか。ここで紹介した『現代の批判』

は、学生時代からの、私にとっての「古典」の内の一冊です。少し取っ付きにくいかもしれませんが、一字一句の理解でなく断片でもという気持ちで手に取ってみてはくと思います。

(かねこ・けいいち)

旅立ちの君に

——卒業生へのことば——

法学部 助教授 古 賀 衛

谷いくつ過ぎて来にけり
いず方に着くとしもなく
見下せば、眼路も遙かに
見ゆるイタリア、若き日の憧れの国
(ヘッセ「アルプス越えの峠」(片山敏彦訳)より)

君は、御両親から「テレビばかり見ないで、たまには本を読みなさい」なんて叱られたことがあるでしょう。宿題やレポートのために、読みたいくもない学校推薦図書をせつせと読んだこともあるでしょう。いま、君はそんなことから卒業するのです。古い衣装を脱ぎ捨てて、広い世界へ出ましょう。本で読んだ重苦しいことを忘れて、アルプスの山々を見渡すような生き生きした目で、自分の道を見つめるのです。

ただ、ひとつ君に望みたいことがあります。君は4年間この大学で知性と感性を磨いてきました。古い衣装は捨てるとしても、その日々のことを大切にしてください。そして、もし一つでもよく勉強したと思う学科があれば、その教科書とノートは捨てないで一緒に持って旅立ってください。時にはそれを開いて読み返すことです。それが君の知性の証^{あかし}であり、社会人としての読書の原点となるはずです。お別れに、再びヘッセの詩を。(「春」より)

しかしわが心の中に書き留められてある
過ぎし日々の中の美しいものは皆
少しも消えず 春から春へ存^{たも}てて
どんな風にも吹き散らされる^{おそ}懼れはない。

(こが・まもる)

社会人と読書

卒業生へ読書のススメ

仕事と読書

——余裕ある人生を——

経済学部 講師 横川 和 男

社会人と読書とのテーマを与えられたが私自身社会人になってから読書をしなくなってしまった。職業上の読書の機会は多いが仕事以外の時は活字から離れていたいと思う事が増えた。このテーマで書けというのはそうした私を懲らしめ反省させるための機会を与えるためであろう。

世代間のギャップが大きいと久しく言われる。世の移り変わりが速く、生活様式や考え方感じ方が激しく変化しているためであろう。しかしそのみではない。社会人に読書はじめ文化活動に携わる時間の余裕が無く文化が若者中心に展開するからである。限られた社会生活しか営まない若者により支えられた文化は趣味に傾き流行に流されがちである。視覚、音感が中心となり文字は脇役となる。また諸君達が現在自分達の文化と思うものは10年もすれば古くなってしまうのである。その時に自分達のための文化が周りに無い事に気付くであろう。それでは直接の知り合いを越えた同世代の者同志の間にも世代間にも本当の友情は育たない。そして生活のための経済的利害が前面に出る様になる。

今社会人となられる卒業生諸君にとっての10年20年後はそうでなくなる事を期待する。そのためには一人一人が仕事にかかり切りでは駄目なのである。会社の言う事ばかり聞かず、仕事に割く時間は程々にして、読書の時間の持てる余裕ある人生を過して戴きたい。但し仕事の時間中は集中して働く事。

以上卒業生へのはなむけの言葉と共に自ら省りみでの辞である。

(よこがわ・かずお)

知的生活の中の読書

児童教育学科 教授 松村 敬治

読書数の少ない自分が読書のススメを記すことは魚が山登りをススメルごとく滑稽であるが、敢えて恥を忍んで、知的生活の中の読書について記すことにする。

現代は情報の時代と言われ、毎年、膨大な数の雑誌、単行本、専門書が発行されている。この中で無闇矢鱈に読書することが、直接、知的生活を営むことに繋がるとは思えない。何故ならワープロ等の発達で本の出版が便利になった分、安易な出版も目立つようになったからである。即ち、本を読むことで知的水準を下げ、老化が進む確率も高くなったのである。こうした現代においては、如何に良い本を選び出すが、知的生活を進める上で、一つの鍵となる。

自分の専門分野の本の場合は、本から引き出せる情報量は一目で推測がつくが、一般の書籍の場合はそうはいかない。幸い自分は、あらゆる本に当てはまる一つの基準を持っている。本の価値を、著者の知識水準と精神状態、及びその本の執筆に著者が懸けた時間で決めるのである。この基準を実際の本に適用するにはいささか困難を伴うので、小説などに対しては、もっと簡便な選び方を利用している。それは、三十年以上前に発表された本で、今でも尚、生き残っている本を選ぶのである。

こうした基準を満たす本も結構たくさんあり、誘惑に駆られて読書する場合もあるので、限られた時間の中で知的生活の奥義を極めるのは、なかなか困難であるが、楽しみでもある。

(まつむら・けいじ)

卒業生から

後輩へ

アラウンド・ザ・ワールド
の気分で

外国語学科 英語専攻 笹田 晴子

私は図書館2階の閲覧室に入ってすぐの、雑誌棚の前の場所が好きでよく通っていました。同じ図書館の中でも、他の場所は何となく緊張してしまい落ち着かなかったのですが、あの雑誌棚の前席だけは、ちょっと異空間で、西南学院大学での私のお気に入りの場所の一つでした。今どうしてだろうなと考えてみると、あそこは学術書が多い図書館の中で一番ミーハーな場所の様でした。新刊書と雑誌類に狭まれて、まるで街中の本屋の真ん中に机を置いて「さあ思う存分読んでいいよ」と言われてる様な幸せな気分になるのです。こんな巷の雑誌が立ち読みじゃなくて重々しいイスと机で読めるなんて、という事実が、変だなあと感じつつもありがたいのでした。一方、時々私は図書館の本棚の間をブラブラ散歩して、本の多さに感嘆し、無知な自分に読ませねば、と何冊もかかえて帰り、とても幸せな気分になって貫読しなくても平気で返却でした。重い本を何冊も遠い家まで持って帰らせる図書館という空間の力はすごいと思います。これも「図書館は、あらゆる世界を網羅している」という魅力のせいでしょう。図書館に入れば、いろんな「世界」が備わっていて、その世界を知ろうと思えばいつでも、まがりなりにも「知る」ことができます。2階から4階まで、ブラブラ眺め歩くだけで、気分はアラウンド・ザ・ワールド、でした。

(ささだ・はるこ)

図書館について一言

法学部 小川 敏治

自分にとって図書館とは、サークル活動に不可欠な研究資料の宝庫であったり、定期試験、あるいは、公務員へ向けての勉強のために利用する場であった。性格からして、どちらかと言えば、他人が勉強をしているという環境に立たされることにより、はじめて自分も頑張らねばとを感じる方であり、その点において、勉強をする場として図書館を利用することは、自分にとって何がしかのメリットがあったと言える。

図書館を利用する時にいつも思うのであるが、そこに来ると、同じ学内であるにもかかわらず、他の場所と比べると、何かしら厳肅な雰囲気を醸し出しているのは何故なのであろうか。歴代の先輩の方々が、学問の場として蓄積されてきた伝統の重みが、そうしたただならぬ装いをさせているのであろうか。様々な情報を提供してくれる、きれいに整頓された書物の数々は、我々にこう語りかけてくるようである。

「ここへ来たならば、一切の煩惱をとりはらい、目標へ向けてまっすぐ進むのです」

ところで、図書館は、他面、めまぐるしく変化する社会状況に柔軟に対応できる身軽さも兼ね備えている。それは、最近コンピュータを導入し、本の貸出しの手続きが、以前に比べて非常にスムーズになったことである。このことは、より多くの学生に、よりよく利用してもらい、必要な情報を沢山吸収し、立派な社会人として巣立って欲しいという計らいに他ならない。後輩諸君も、そうしたことを認識しつつ、気軽に利用してもらおうとよいのではなかろうか。

(おがわ・としはる)

卒業生から

後輩へ

図書館との出会い

経済学部 鶴田悦子

大学四年間は、自分自身の生き方を見定めるために与えられた最後の貴重な時間です。その四年間に様々な分野からどのような情報を得、どの様に影響され、どの様に考察するか、によって将来の方向性が決定づけられると言っても過言ではありません。つまり、限られたこの時間をいかに有効に使うかが、大学生に与えられた課題だと思えます。

数学の難問を何時間かけても解けないのと同様に、多くの計画も独り善がりのものではいつまで経っても効率良く実行されません。私はそこに何らかの契機が必要だと思うのです。その私に問題を解く「きっかけ」を与えてくれたのは、図書館でした。

私の図書館との「出会い」は、授業の参考資料を探しに行った事に始まります。ところがある日、偶然手にした本になぜか興味を覚え、それが、思いもつかなかった本を読み始める「きっかけ」となったのです。この「出会い」が、私の将来の選択に大きな勇気を与えてくれました。ただ、今となってはその「出会い」がもう少し早ければ、もっと時間を有効に使えただろうに、と後悔していますが…。

今、大学に入って何をしようかと迷っているあなた。まだ何の「出会い」もないあなた。どうぞ、図書館へ行って見て下さい。そこで学ぶ人を見、目の前に広がる本を見、そしてその一冊を手にして開いてみる事、それら全てがあなたに何かを問いかけてくれるはずですよ。きっと素晴らしい出会いが待っていると思います。

(つるた・えつこ)

情報銀行と学問の香り

法学研究科研究生 横溝秀樹

職業柄(?)というべきか、はたまた性分ともいうべきか、私にとっての図書館は、読書する場所というよりはむしろ情報収集の場所である。もともと、必要性に迫られて図書館利用者へと転身したわが身であるから、たいそうなことはいえない。しかし、図書館が情報銀行であるというのは、私にとってまぎれもない事実である。

かくて、学生証なるキャッシュカードを使用し、私は情報銀行から様々な情報を引き出していく。ここでは、引き降ろすべき情報は、利用者自らの目や足で獲得しなければならない。情報銀行での私の行動は、概してあわただしいものとなるのである。

図書館の私への恩恵の最たるものは、このような新・旧情報の提供である。しかし、だからといって、図書館が単なるデータバンクだという気は毛頭ない。ここでは何より、学問している雰囲気を実感できるからである。ふつうそれは、閲覧室での読書のときに味わうものであろうが、私の場合、それは、静かに並んだ図書の、あの「すえた」香りを通してであった。気ぜわしく動き回る私にミスマッチな図書の香りは、コーヒープレイクにも似た効用がある。時間のすきま…や、学問してること…などを意識させ、さらには、学問的意欲を高めてくれる気さえしないではない。

「本というものは積み重ねておくと、自然とひとつの香りが立ちのぼる」という。ツン読をよしとする訳ではないが、それはどうやら確かなようである。「君は、図書の香りを満喫していますか?」

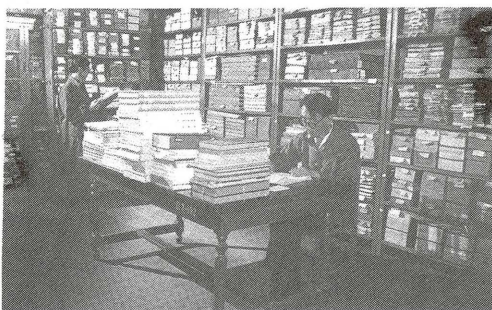
(よこみぞ・ひでき)

中国には現在1075校の大学があり、その在学生総数は、本科生及び大学院生を含めて約221万人を数える。これらの大学は、すべて国立もしくは公立の大学であって、その中の21校が国家重点大学として指定されている。

吉林大学は中国東北部長春市（吉林省の省都で、人口約170万）の文化区に位置し、創立1946年、東北部における唯一の国家重点指定総合大学であり、学内には中国言語文学・歴史・考古学・経済学・法学・哲学・政治学・外国言語文学及び数学・物理学・化学・環境学・コンピュータ科学・分子生物学などの20学部があり、その他に日本・ソ連・朝鮮・古籍・人口・中国文化・理論化学・原子及び分子物理などの17の研究所を有している。全校に43の本科専攻学科と大学院に修士専攻学科63及び博士学科17があり、全学生総数は1990年現在8010人である。

吉林大学図書館は校内中央部にあり、薄茶色、コンクリート5階建の中に、ユネスコ(UNESCO)の蔵書館の一つとして中国内外の図書約200万冊を収蔵している。各種の蔵書の中には、線装(和とじ本)の古書・地方誌・解放前(1949年以前)発行の雑誌・自然科学に関する外国の定期行物などが含まれ、その数量、種数の豊富さで特に有名である。なお、日本語の書物も相当数所蔵されている。

館内には古書・文科・理科・外国語・定期刊



古籍書庫の風景

文学部国際文化学科
講師 王占華

吉林大学の図書館

行物・工具書(辞典・字引・年鑑・年表・索引等)、全東北地区外国教材センターの七つの書庫ならびに十数カ所の閲覧室を有している。さらに各分野における専門書と定期行物・副本を関係学部の教師閲覧室へ配付することを実施している。各学部・研究所にはそれぞれ数千冊の図書を保有する小図書館があつて、教師は随時自由に閲覧したり、帯出したりすることができるようになっている。

大学図書館は部分的な開架式制度を採用している。具体的に言えば、文学書と雑誌については、だれでも手に取って見ることができる。教師と大学院生はすべての本を自由に閲覧し、帯出することができる。(学部生については、開架

以外の本はカウンターを通して閲覧、帯出する形になっている。)図書の管理は、現在は項目分類作業に一部コンピュータを導入しているが、大部分の整理及び貸出し業務はまだ人力作業である。館内には、書名・著者名・主題の三種類の目録が備えてあり、利用者があらゆる角度から検索することができるようになっている。図書1冊を借りるのに要する時間は平均約10分ぐらいであるので、館内は毎日忙しい雰囲気一杯であり、図書の借入・貸出しに列をなすこともしばしばある。規定により本科生一回に付き10冊、大学院生及び教師

は20冊まで借り出し可能である。借出期限は本科生・大学院生(留学生)は1か月以内、教師は3か月以内となっている。

また、館内には複写室が設けてあり、コピーB5サイズ1枚で、費用は日本円で7円であるが、これは大学生の月当りの生活費の約0.6%に当るので、利用者は余り多くない。

西南学院大学の図書館とくらべると、西南の方は、管理の方法と貸出し手続はかなり進んでおり、吉大の方は、蔵書の数に豊富であるけれども、現代技術を導入して、その利用率をいっそう向上させる必要があると思う。

(Wang Zhanhua 中国語・中国語学特講)

近未来の図書館は

動きだした増改築計画

情報サービス課長 篠崎 珣

本学の現在の図書館はオープンして22年を経過しており、蔵書数も50万冊をはるかに超え、新しく受入れた図書・雑誌を利用者の皆さんに提供できる十分なスペースもほとんどなくなってしまいました。そしてまた、皆さんが日頃感じておられるように、古くて、薄暗く、試験期には座る場所さえない。

こうした不便を解消し、図書館本来の機能を回復させ、同時に“現代の利用者のニーズ”に応じながら、これからの大学の研究・教育活動をより高度で充実したものとするため、いよいよ平成2年度には図書館の増改築がスタートする予定です。

☆ ☆ ☆

近年、多くの大学図書館の新設あるいは増改築が実現しています。慶應大、上智大、関西大、京都産業大、鶴見大など広いスペースと近代的な設備を備えた垂涎の図書館ができています。近頃は大学生の図書館離れに苦慮する大学も少なくなく、その解消のためか図書館を研究・教育のためだけでなく、多目的に利用できる魅力あるものにしたいとの願いが込められているようです。多目的ホール、グループ学習室、グループ視聴室、個人ブース、ラウンジ、休憩コーナー、軽読書コーナー、吹抜けを利用した日本庭園など従来の図書館には見られなかったものに、思いきったスペースを割いています。また近年の情報化社会に即応し、コンピュータ室、文献複写室、マイクロリーダー室など、近代的な設備も完備しています。では本学図書館の増改築にはどのような計画があるのでしょうか。増改築の詳細な情報は、今後より正確なものをお伝えすることができると思いますので、今号ではあくまでも推測であることをお断りしておきましょう。

☆ ☆ ☆

◎**エントランスホール** 玄関を入ると、まずゆったりとしたスペースがあり、ホールでは観葉植物や絵画あるいは古文書、絵巻物などの展示を楽しみたいものです。

◎**学習室** 通常はともかく、定期試験期にも、より多くの学生が利用できる落ち着いた雰囲気のある学習室を確保することは重要な課題の一つです。

◎**閲覧カウンター** B D Sを採り入れた入退館システム、図書帯出・返却手続きの簡略化とスピード化をめざし、かつ混雑しないスペースが必要です。

◎**情報検索** 図書館界では現在多くの図書・雑誌情報のオンライン化が急ピッチで進められています。本学図書館においても、将来的に目録カードをなくし、利用者自らコンピュータ端末機で情報を検索することが計画されています。

◎**A Vコーナー** 映像・音響システムの普及は新しい文化を形成してゆきます。研究・教育の分野で視聴覚設備が重視され、図書館にも不可欠なものとなりました。考えられるのはC D、L D、レコード、オーディオカセット、ビデオの鑑賞できる一体型の個人ブースやグループ視聴室といったもので、若い人たちのニーズに応えることができるでしょう。

◎**グループ学習室** 正規のゼミナールなどとは別に、数人のグループが学習するときに利用できる部屋で、こうした設備も多くの大学図書館に見られます。

◎**書架計画と開架閲覧室** 現在、開架(Open)に出している図書は所蔵数全体の約25%。閉架(Closed)に置いているものの中にも、学生に提供することがふさわしい図書がたくさんあります。この増改築は、向こう20年間を見越した蔵

書計画で約120万冊収容の図書館にする計画であり、これを有効に活用していただくために今後はできるだけ新しい図書を配架していくことも積極的に考えねばならないでしょう。同時に端末機での検索により、Closedをこれまで以上に利用しやすくすることも大切なことだと思っています。また、図書館を利用する皆さんにとって、学習の能率を上げるための閲覧室は閑静で明るいものにしたいと考えています。

◎その他 新聞閲覧コーナー、軽読書コーナー

ラウンジなどは疲労回復のために不可欠で、今よりもっと明るく、静けさを保てるものになりたいものです。

☆ ☆ ☆

いずれにしても、大学図書館は利用者あつての施設です。管理する者と使う者が一体となって、よりよいものを作りあげてゆく努力をしましょう。利用者のみなさんの忌憚のないご意見を心から待っています。

卒業後の 図書館利用について

卒業後、諸官庁、企業などに就職し、それぞれの職場での研修や自己研鑽、あるいは心機一転して資格取得のため、あるいは教養を高めるため、図書館を利用する人が増えつつあります。卒業生は特別利用者として図書館を利用でき、1か月ごとに更新手続きをすれば、長期間にわたって利用することができます。1か月当たりの手続き料金は100円です。在学中利用した図書利用カードは無効になりますので、特別利用者証を交付します。

卒業生は在校生と同じように館内閲覧（文献複写を含む）と、3冊15.日間の館外帯出ができます。

報 告

《図書館委員会》

平元・11・21

- ①平成2年度個人研究図書費による雑誌の購入申請について
- ②平成2年度学部雑誌の継続購入について
- ③平成2年度図書館予算(申請)について

《研修・出張》

- 私立大学図書館協会秋季西地区部会
平元・10・6 京都産業大学
有森、小嶋司書出席
- 私立大学図書館協会九州地区研究会
平元・10・20 九州東海大学
丸田、江頭、瀧本司書補出席
- 日本図書館協会全国図書館大会
平元・10・25～27 宮崎市
田代課長補佐出席
- 国連寄託図書館会議
平元・11・9～10 日本大学
古庄司書出席
- 大学図書館研究集会
平元・11・13 早稲田大学
堤次長出席
- 福岡県・佐賀県大学図書館協議会福岡地区研修会
平2・2・28 福岡女学院短期大学
川上、齋藤、吉積司書補出席

編 集 後 記

『部屋に書物がないのは、身体に魂がないのに等しい』（キケロ、B.C.106～43）社会人としての諸君の部屋にも、ぜひ誇れる愛読書を！